

199
3
447

畫贊
俳諧名物鑑
季

Kodak Gray Scale

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

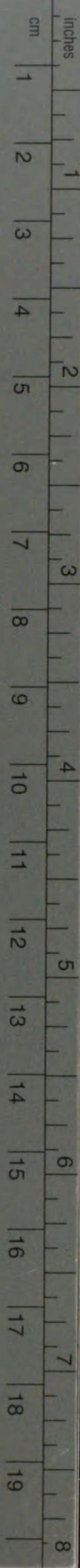
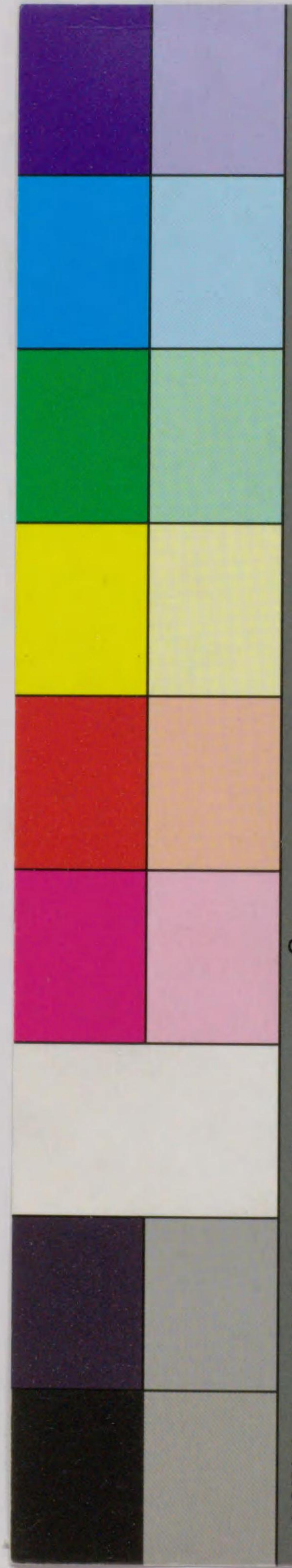
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



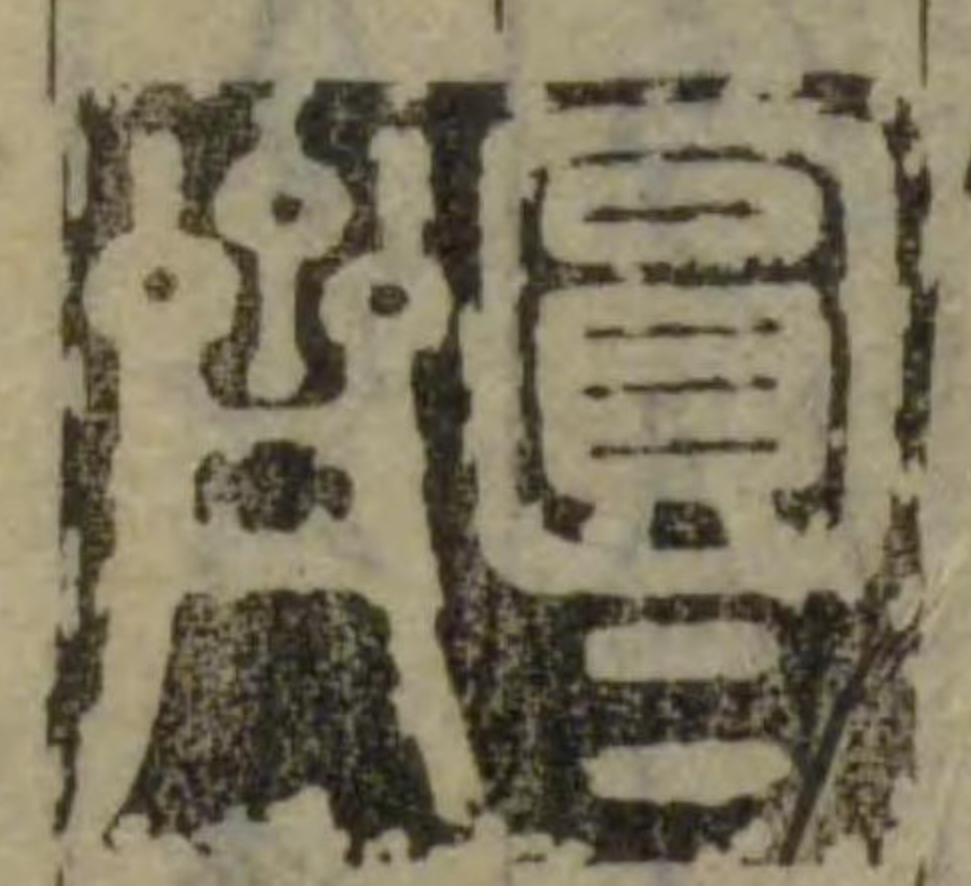
襲はかして。石船をりて。骨を
そとにし。果を足

流螢郷堂

勝法親

明味八辛卯龍舎

價千金膏

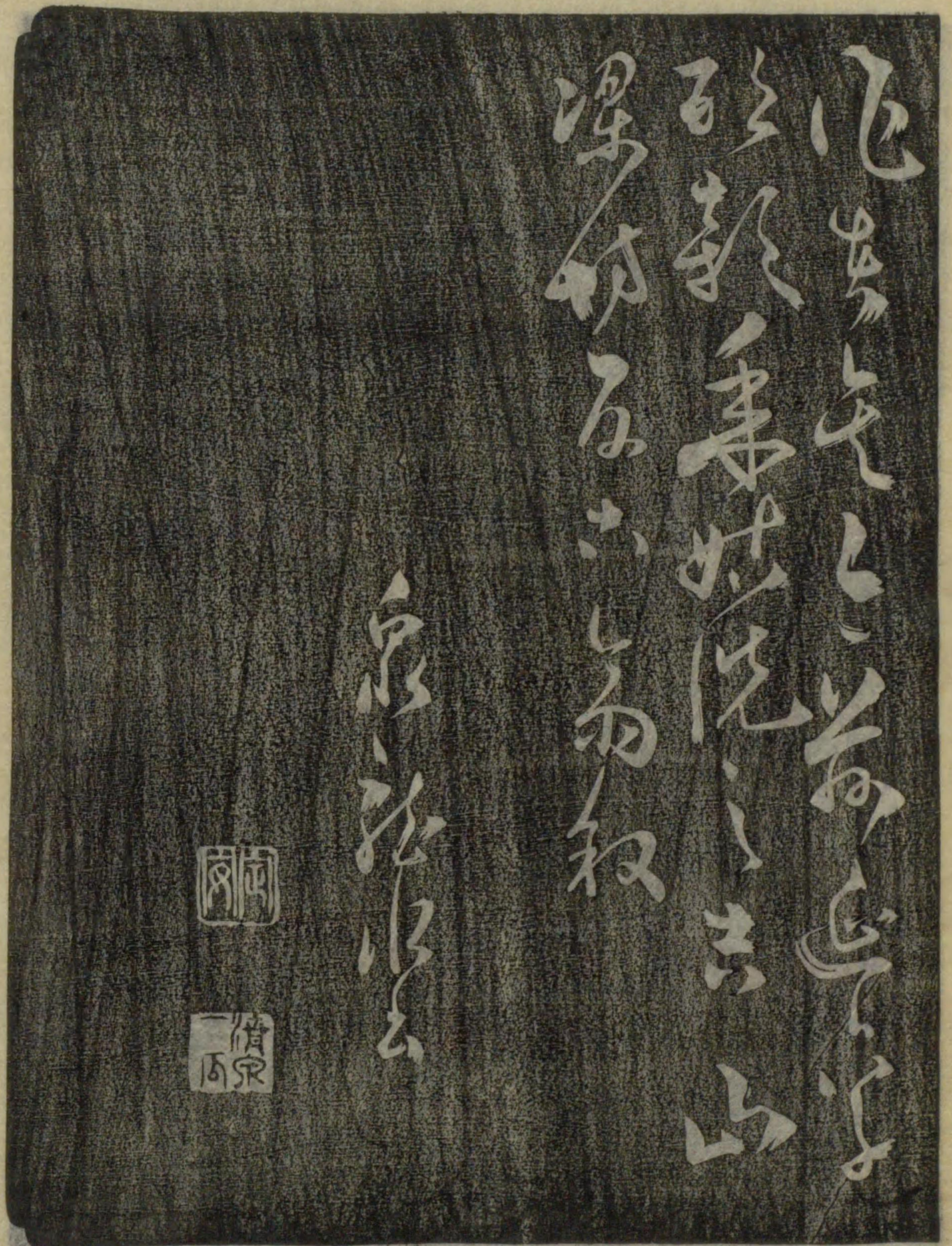


石以分遊お明。卷之
一。之。如。常。神。田。川
高。大。法。茶。糖。亦。板。橋
主。風。系。系。世。子。以。後。也。揮
歌。後。抄。子。之。者。者。者。者
今。奉。之。友。亦。也。之。者。亦。仇

案上之代錄此稿初不
志亦曾之志字如去者
之之字物已心而五之
撰之之字物已心而五之
多之在物之字如漸爾之
之之在物之字如漸爾之
之之在物之字如漸爾之

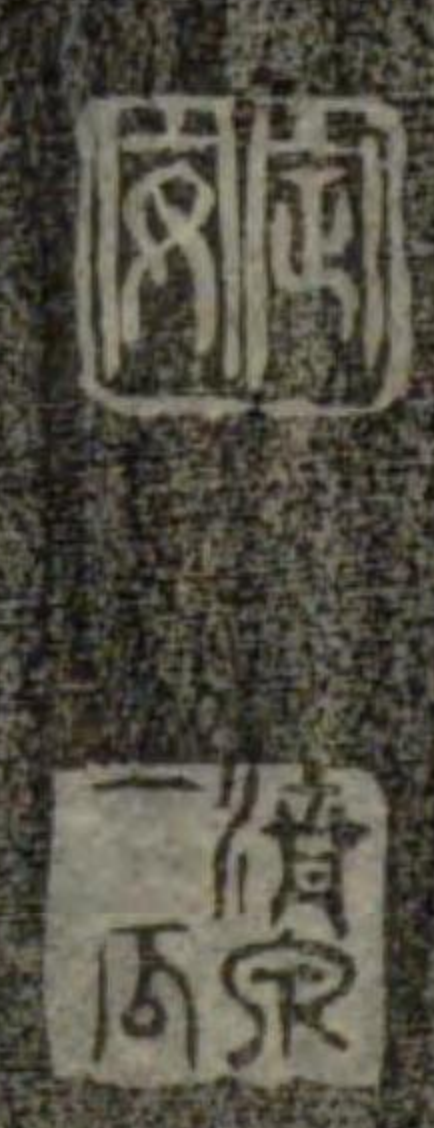
完而空也道乃公之特
如親友之既有一二六款
之其美事之入之物之
决可新也物之入之在
亦只採之自之入之
度以本四身之入之
拾之之之味輕之

勺選武玉川



此書文と前記の字
 致致事此流の共山
 深命存六し而叙

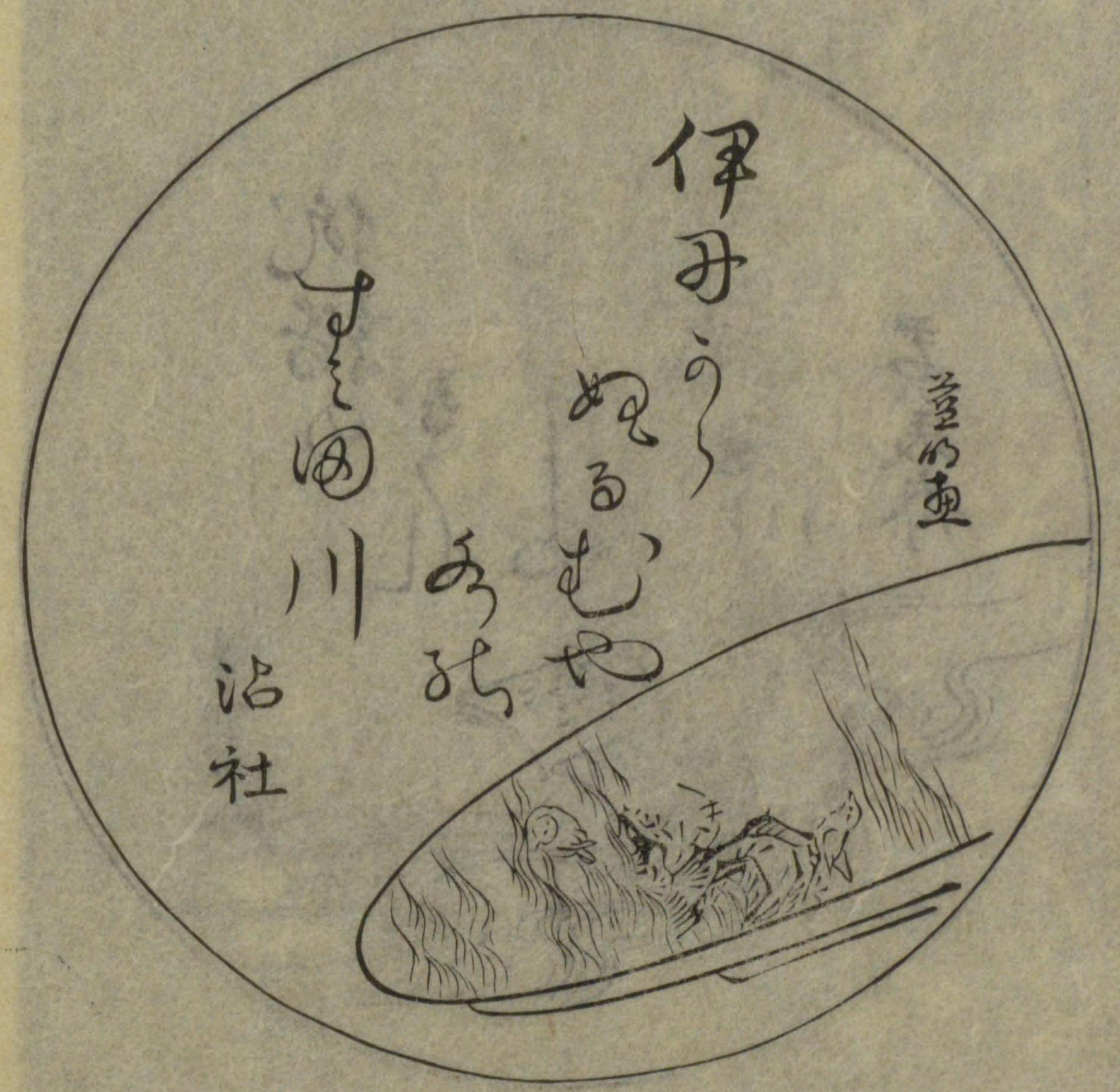
泉松水云



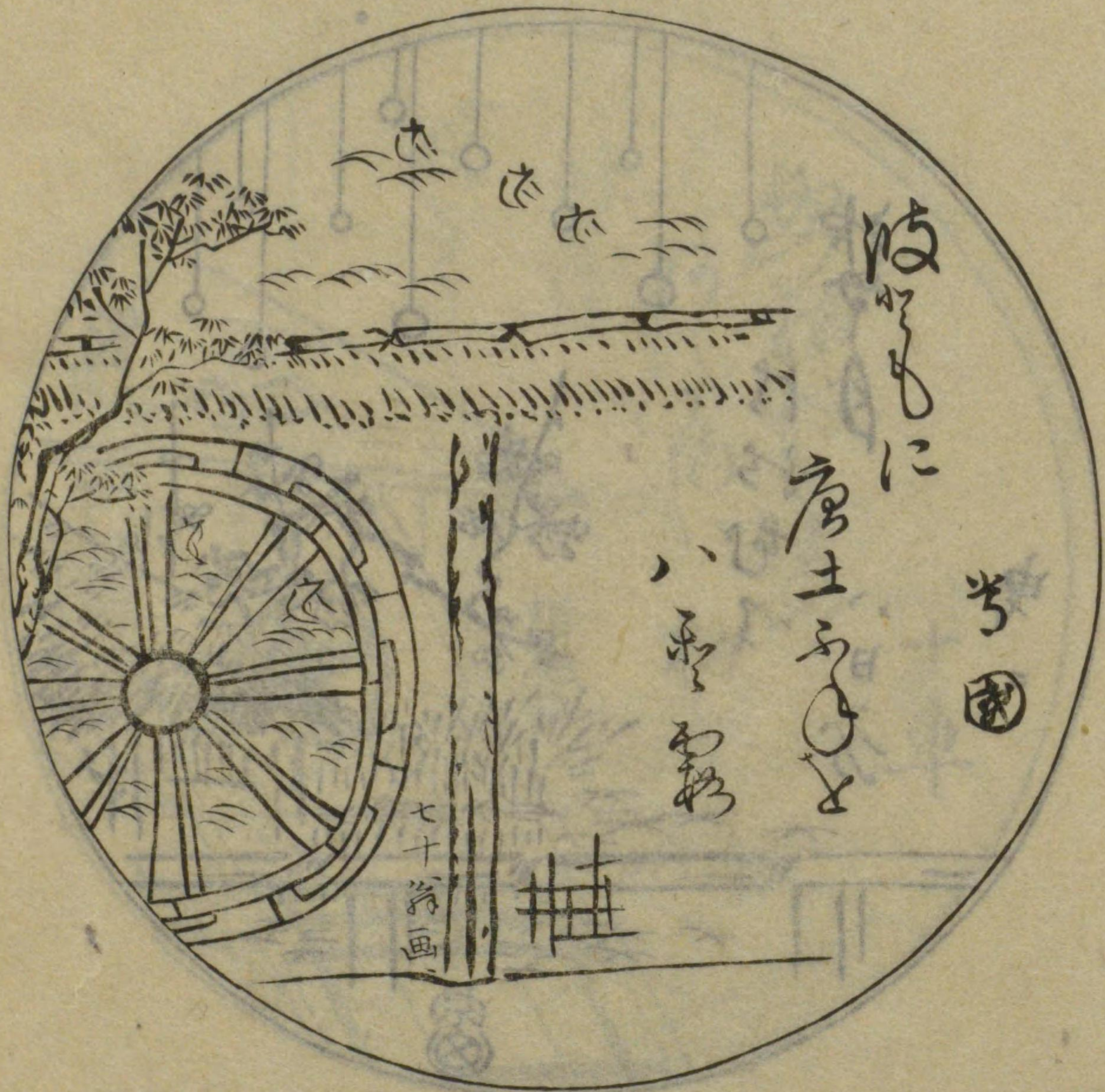
金澤丹後



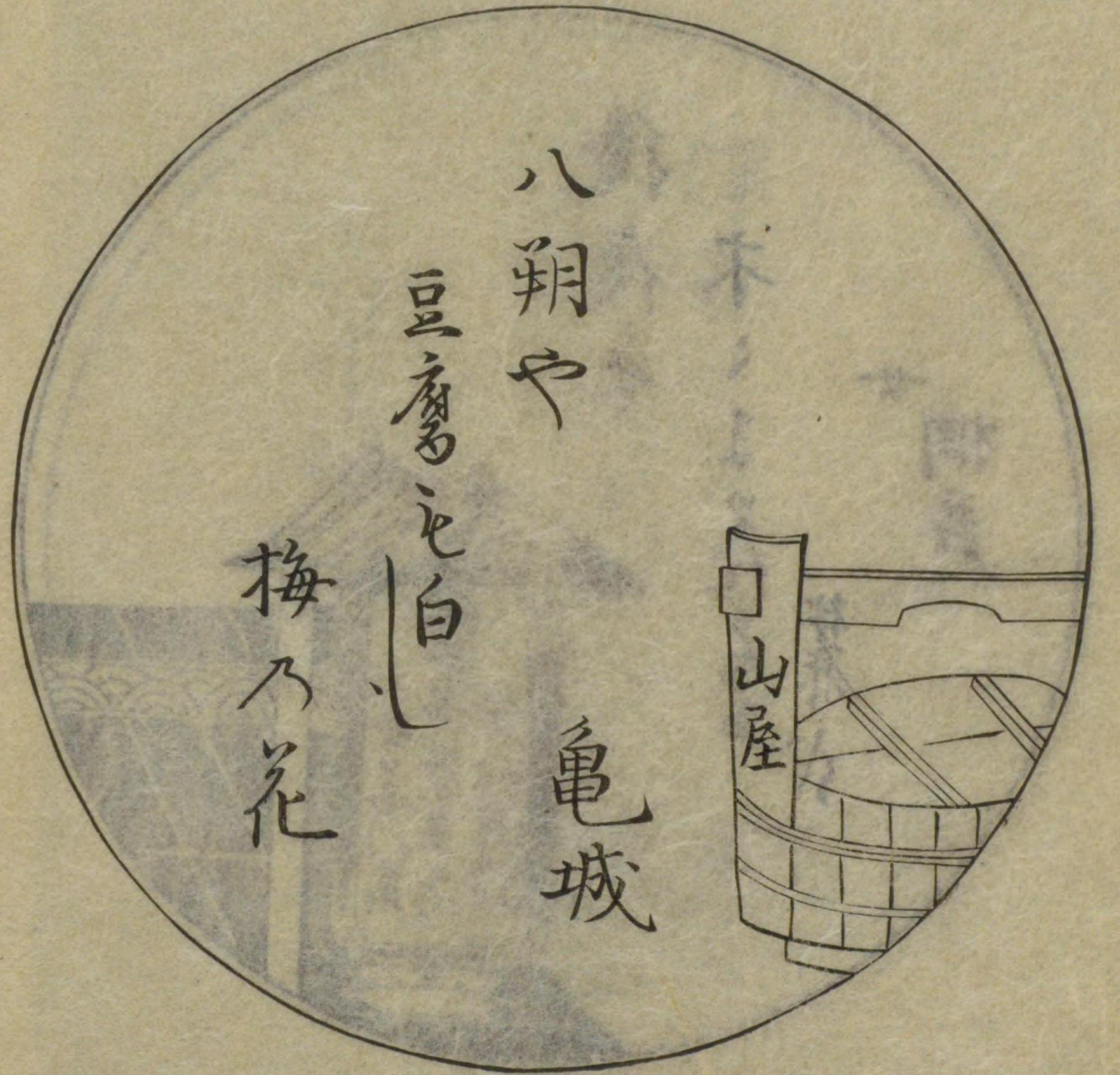
隅田川諸白



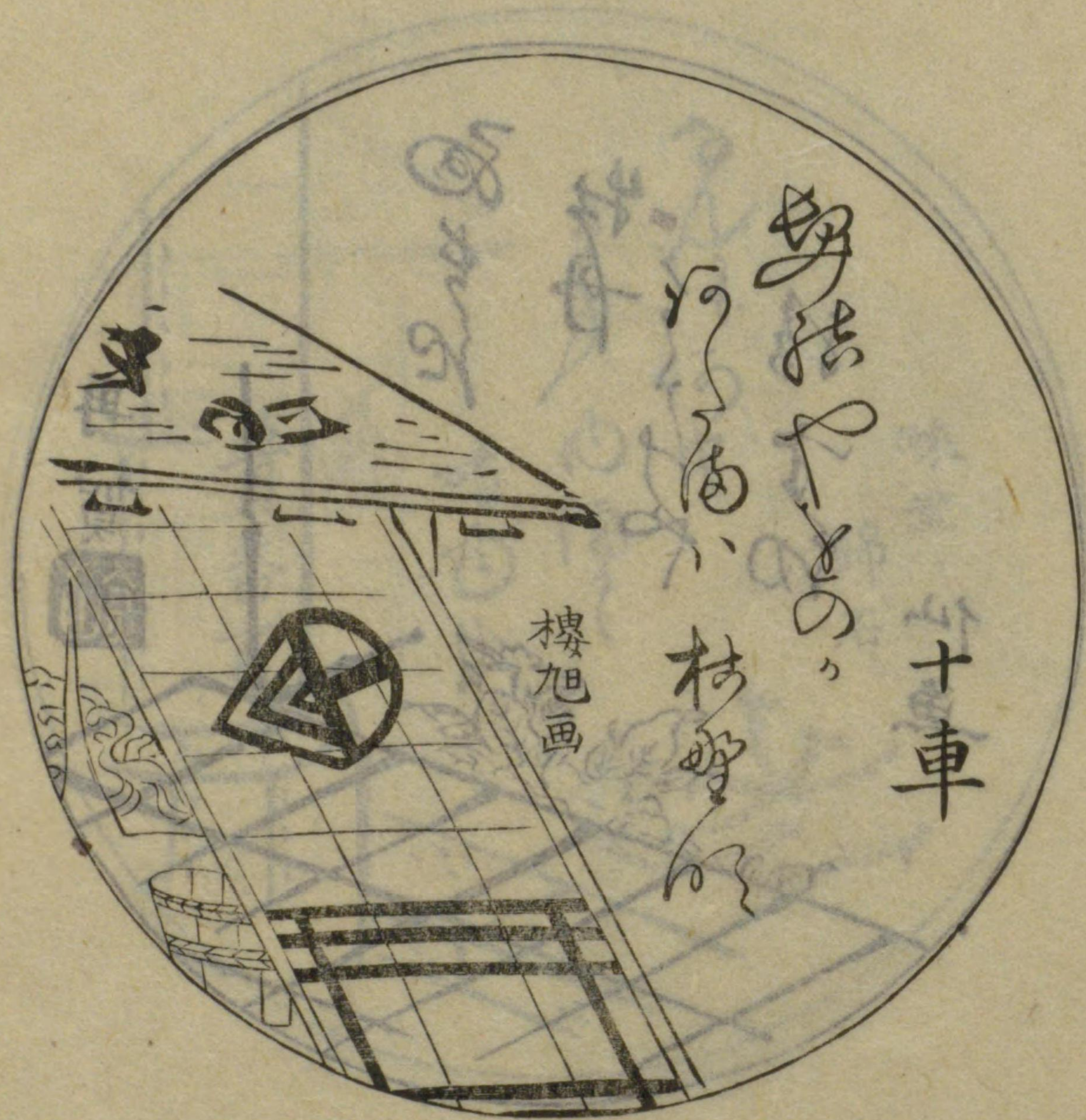
大 潭 画



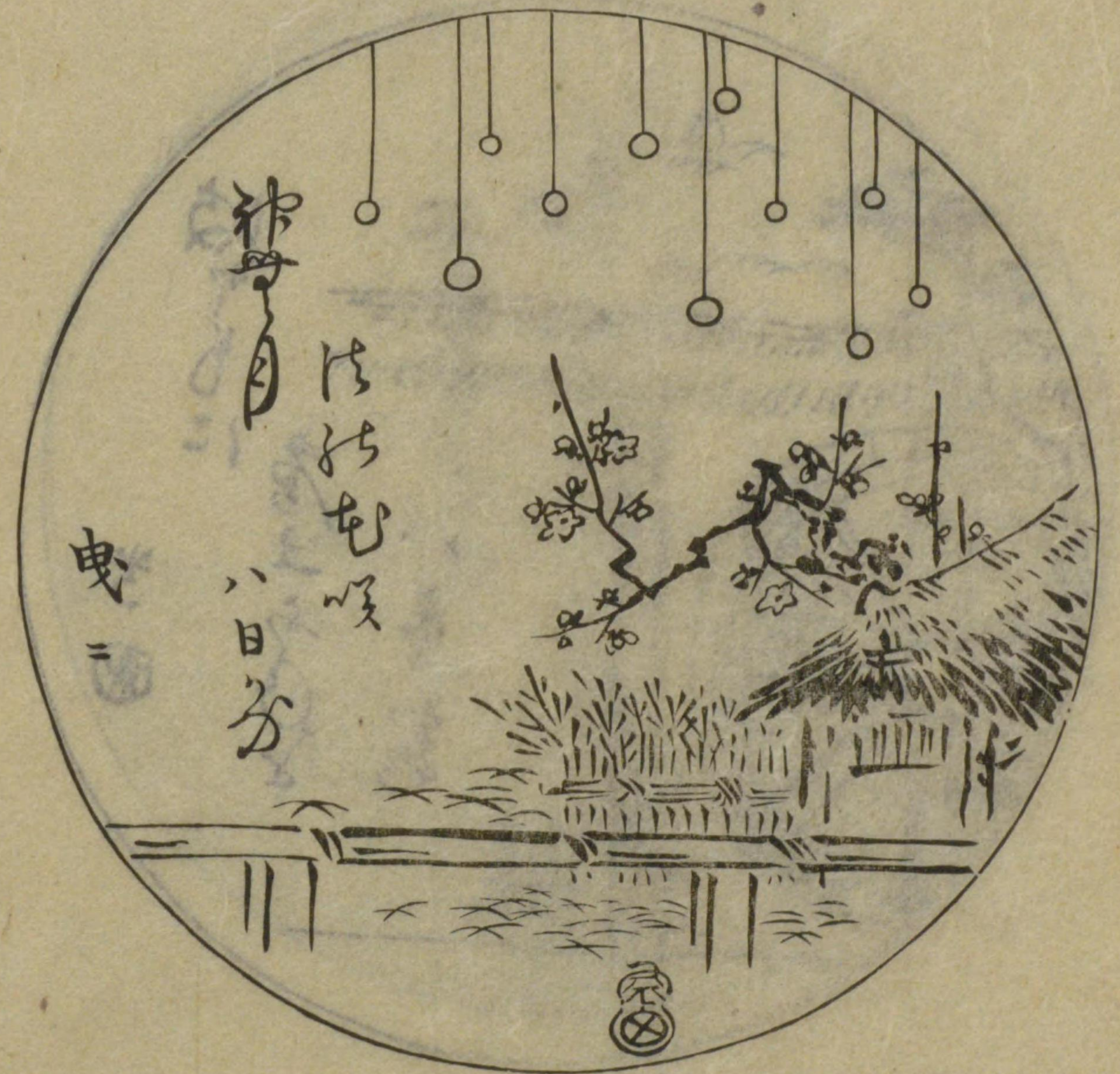
山 麓 夏 磨



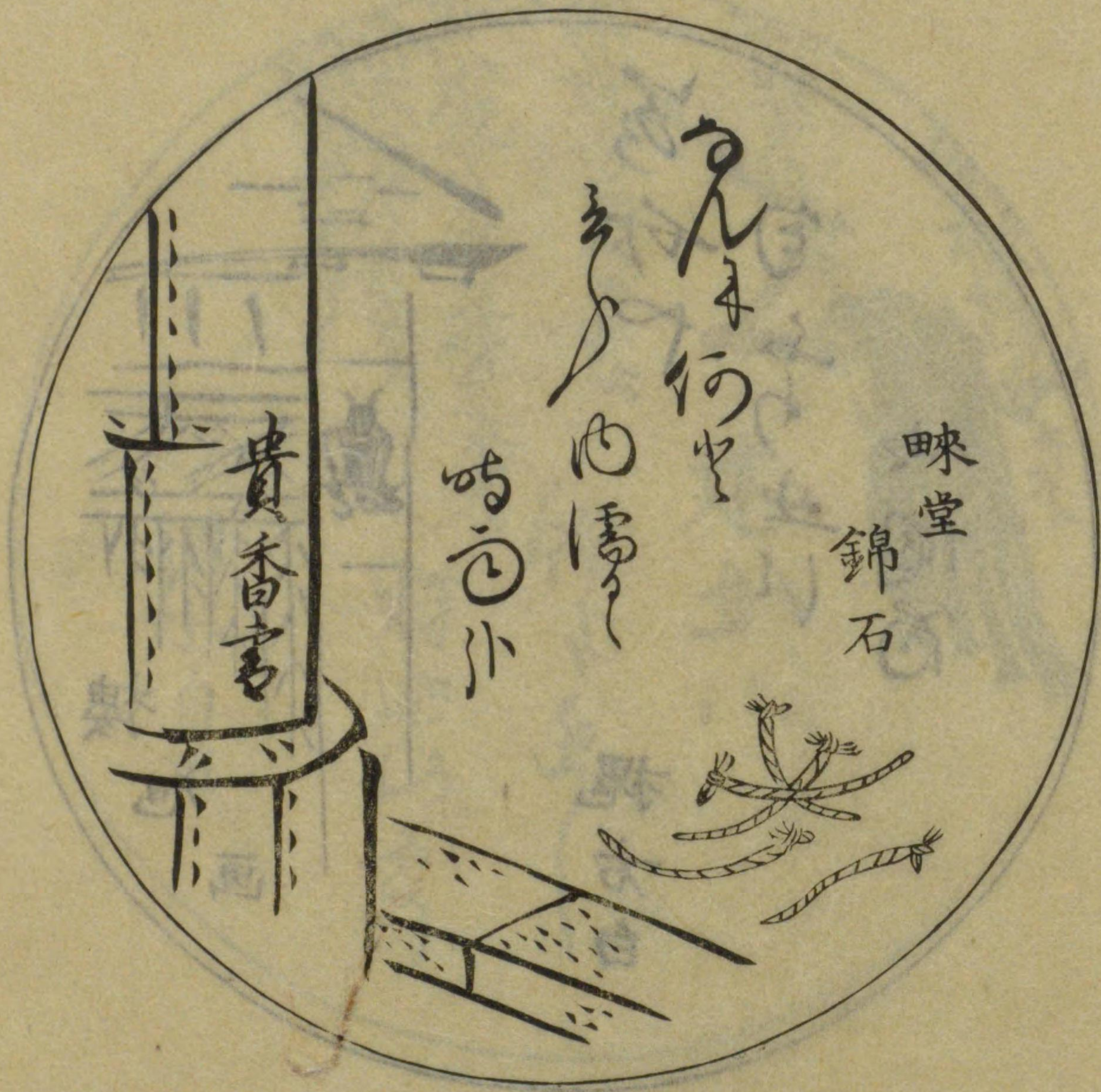
髮結床



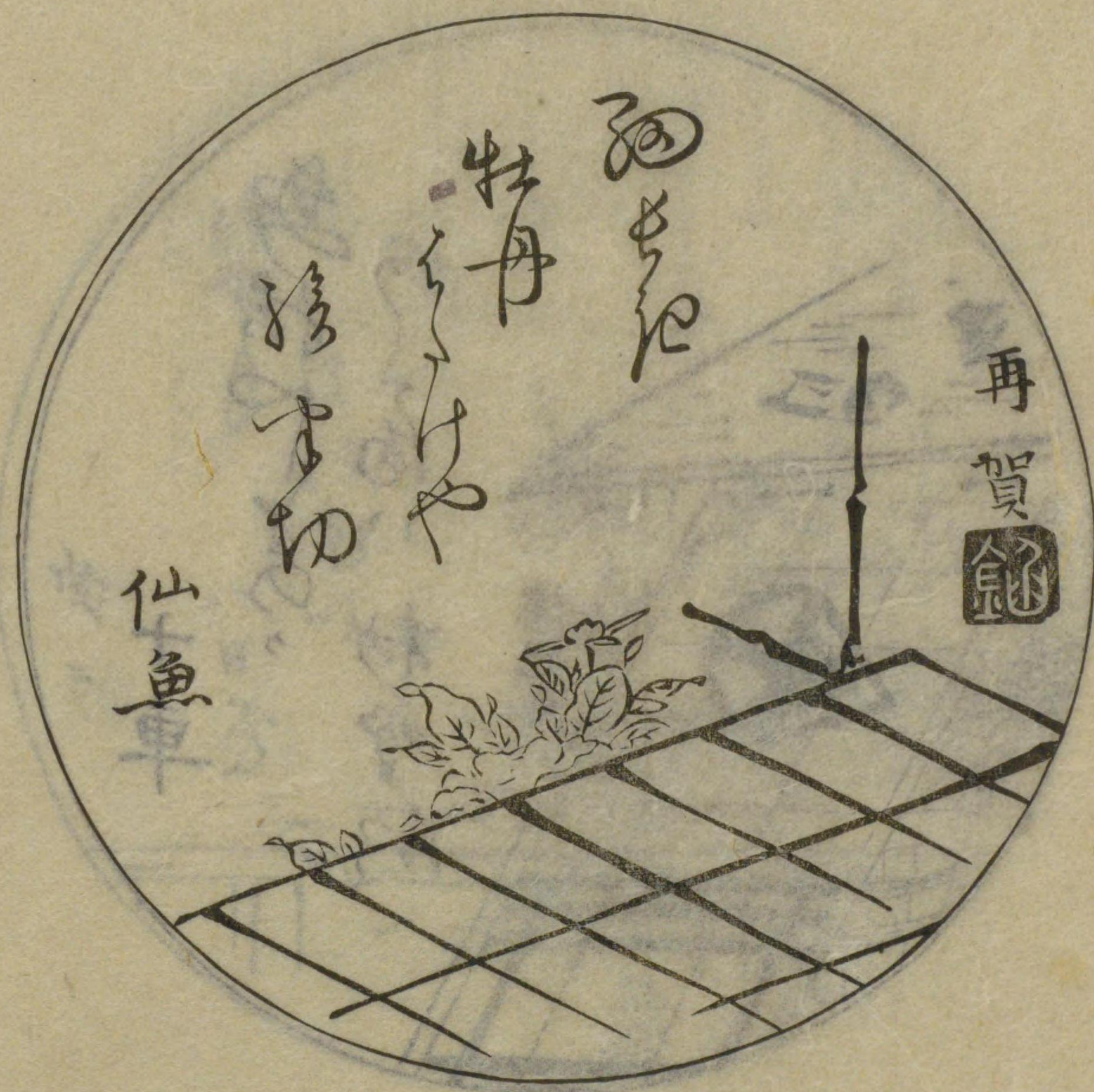
雜目活會式



雜目五至度集



期音藝



釋迦の坊主



渭水自画

釋迦の坊

僧

建立

湖若端重遊



角

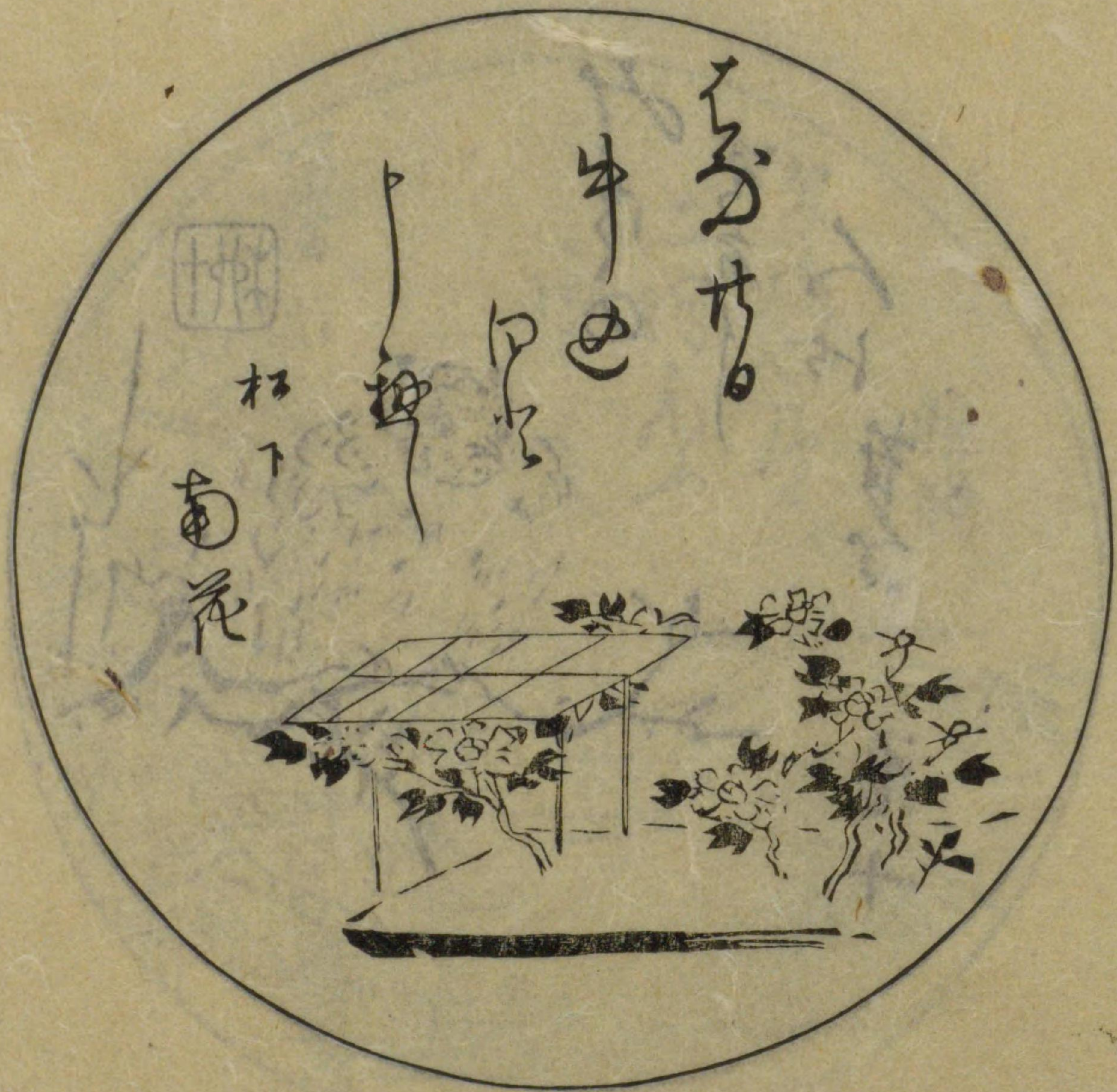
自

由

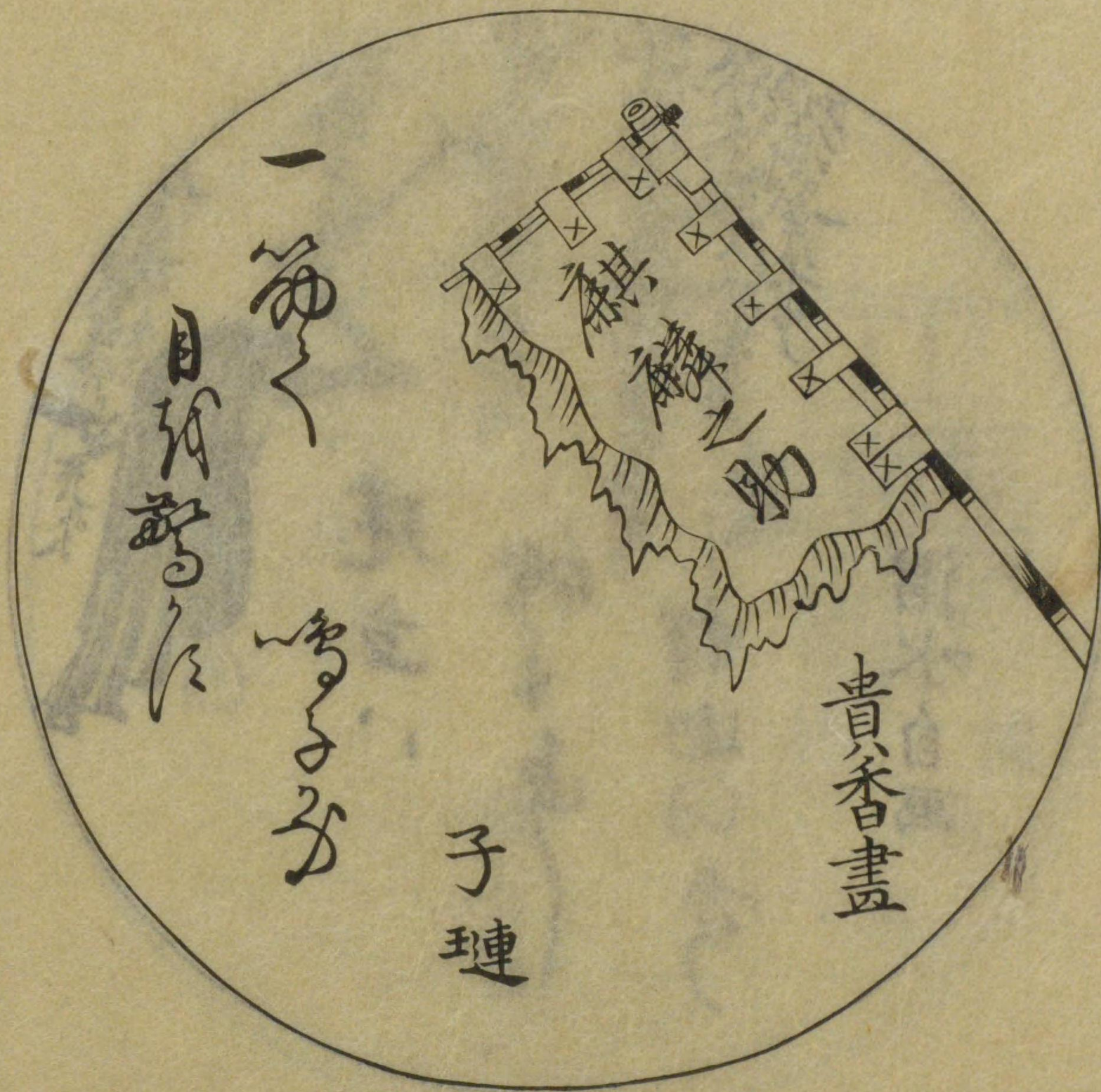
槐右白

樓
旭
画

牡丹屋鋪



題有畫



艾 房 十 堂 寺 洲



衆 爲 麻 弓 哉 智

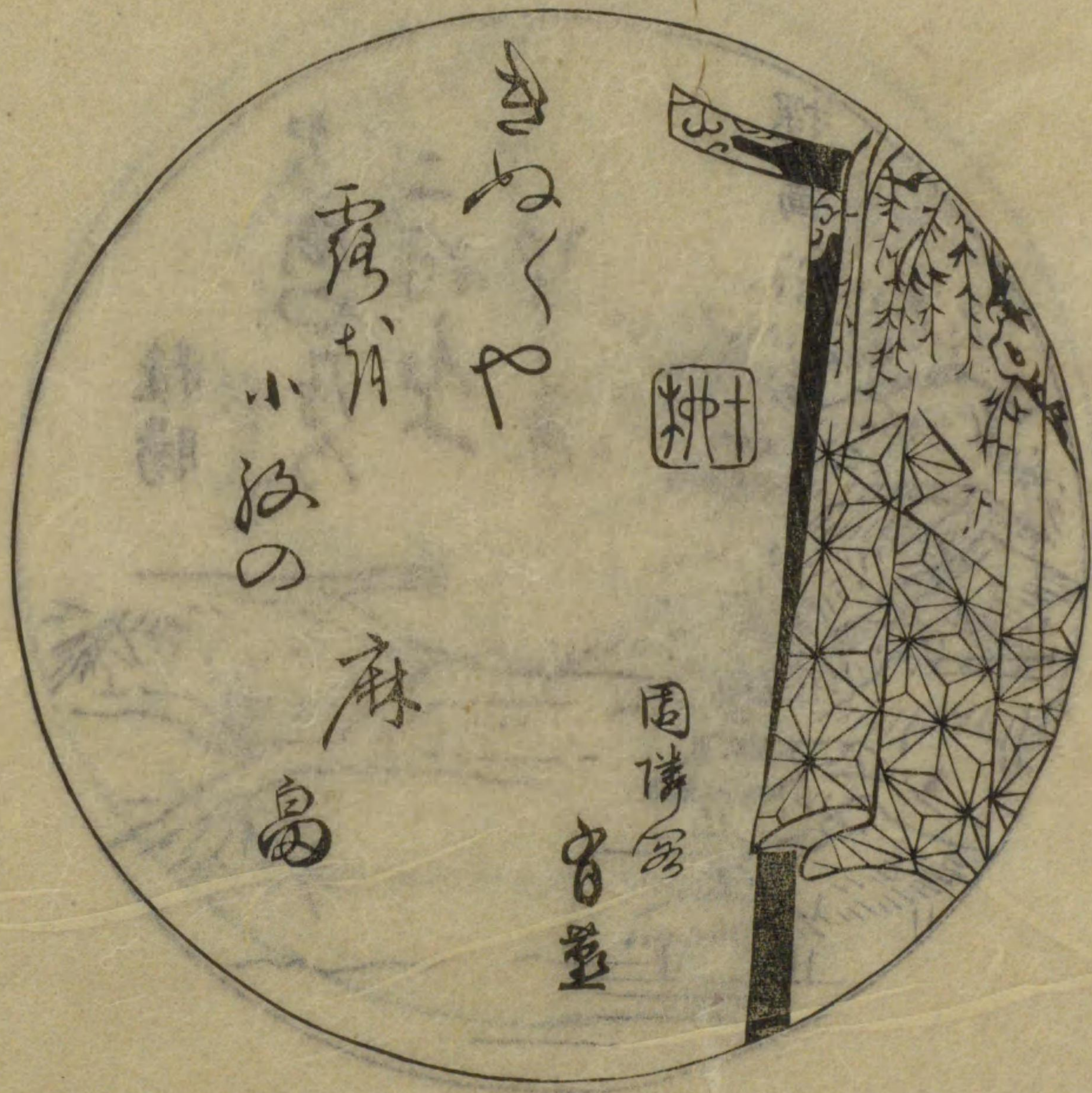


吉原 船



十三

題名 画



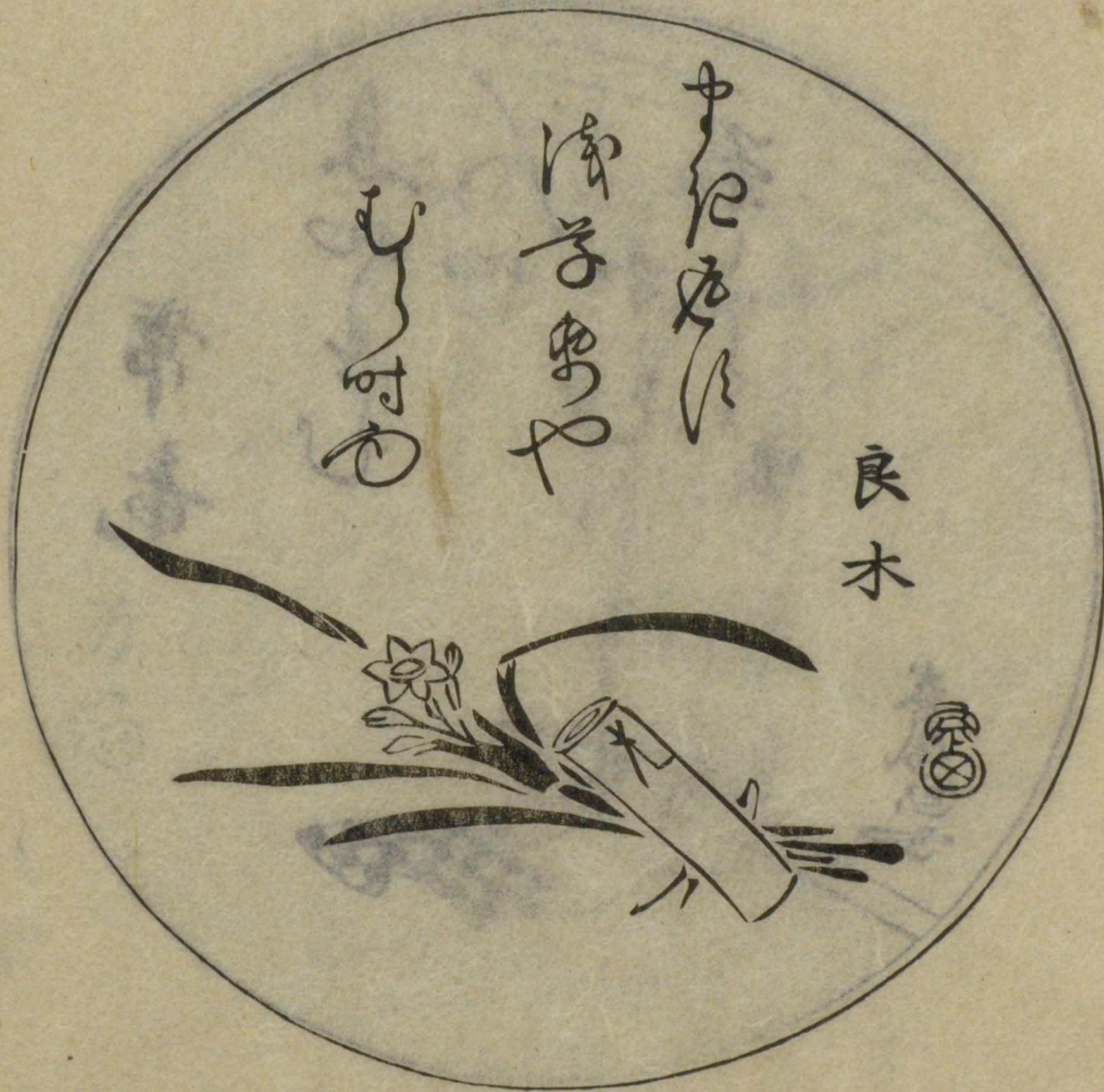
江戸川推木



俣画

和助
葉子
矢場の
涼
うら

浅州源匠



良木

中記
清子
あ
あ

帯 面 両



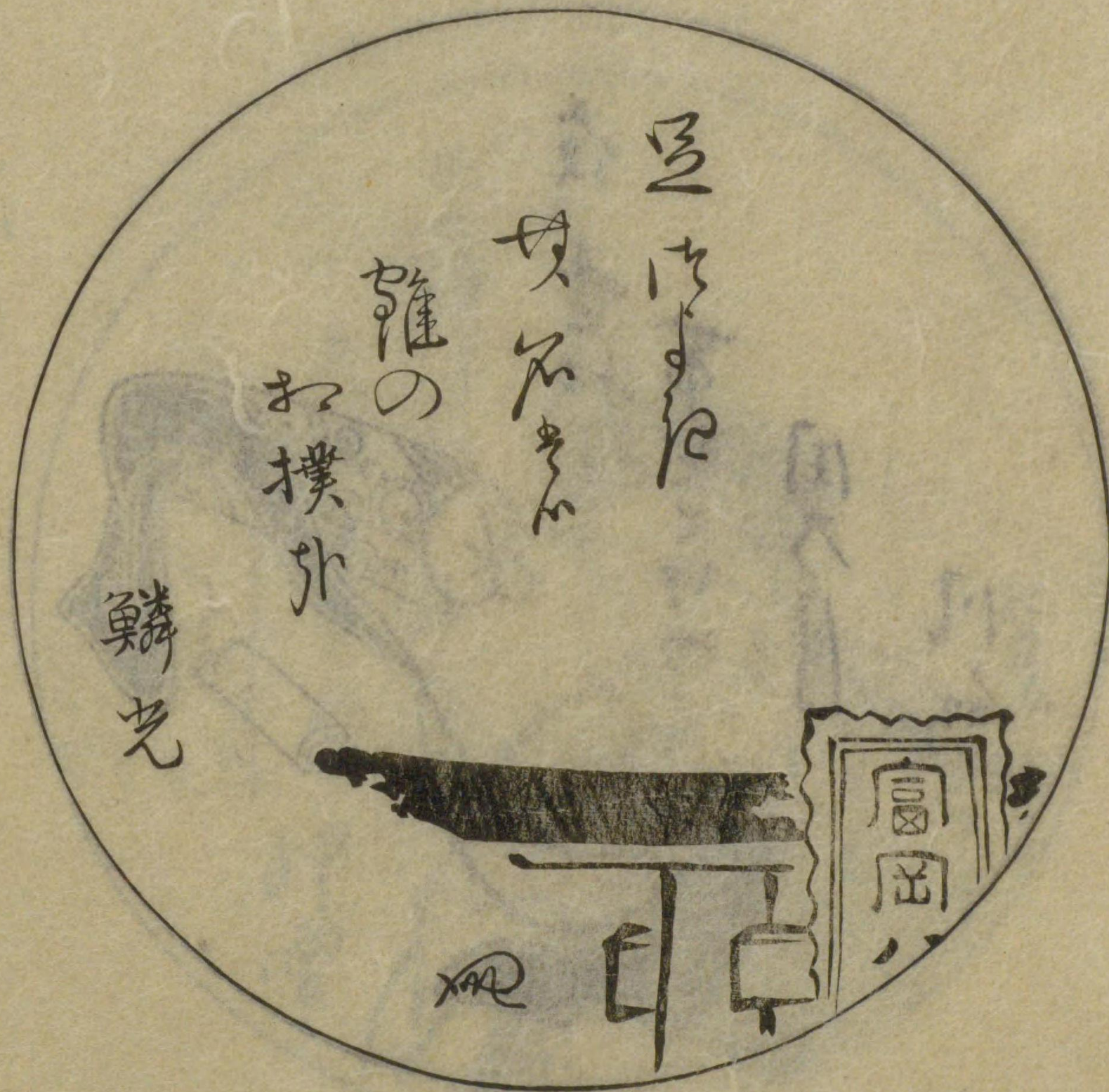
津 打 治 身 湯



糸節 後 其



助之 難 高



女僧川 = 姓



葉園尚司籬



目 和 下 駄



題在字頭

輝雄

自画



心
夜

理

火

心

心

灯籠

歌 仙

鶺鴒の尾くちと去来砂外
 顔も掃ふて公粉の花
 勇拂ふ物の様嬉しく
 去報ゆつて屏取は
 汲つて月に海邊は桔槔
 夕雨の隣はうりより

渭北

果然

北筵

北岷

渭園

文睡



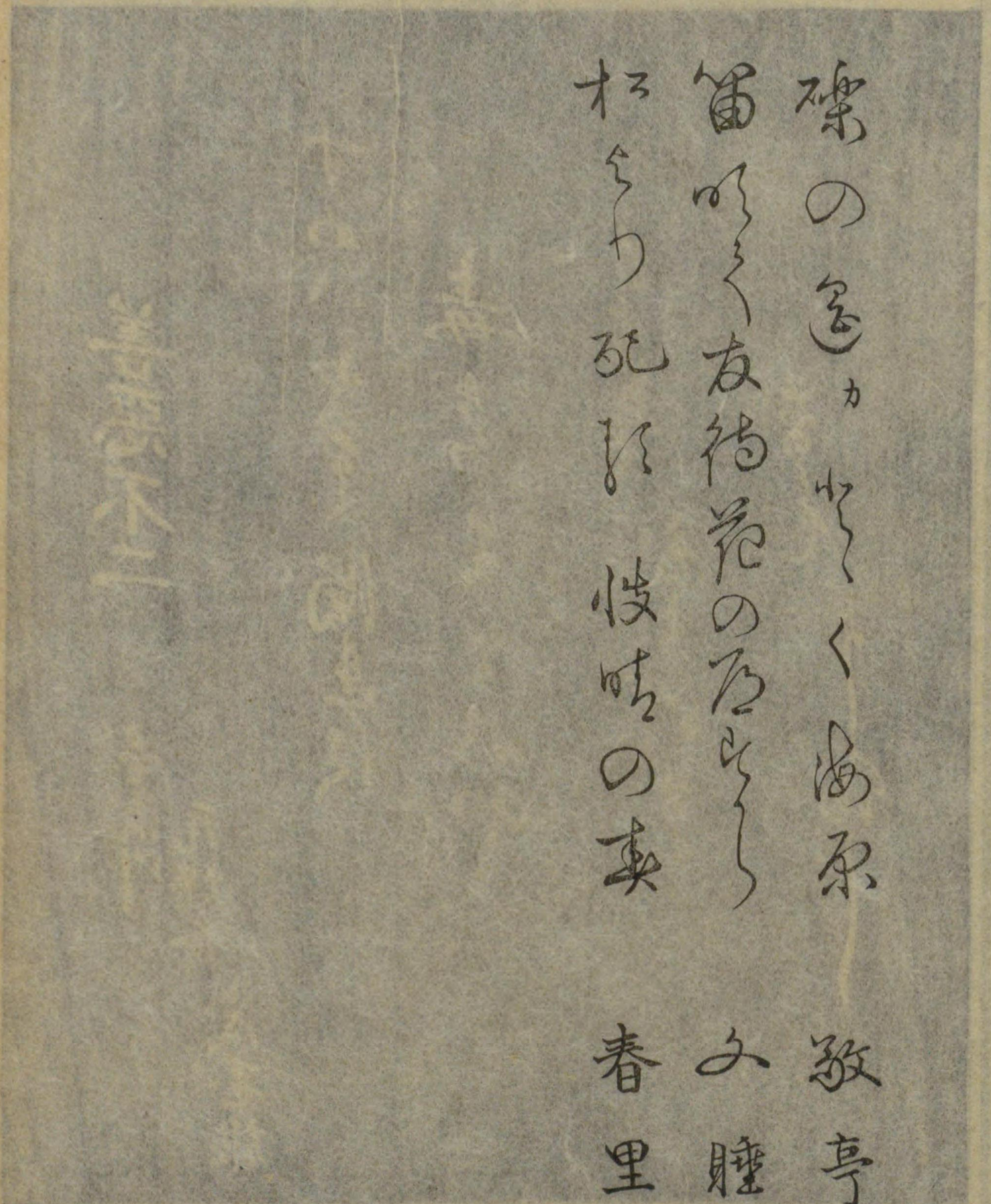
打魚の神（ま） 物類
 舟、川舟の子首横子控
 船場（し） 活衣の袖（う）
 甲斐（ら） 裏（く） 黄昏
 ちん事の毒（も） 毒衣
 靴（つ） 料押（し）
 小便（は） 落（ぶ） せり（の） 月
 拍子木打（は） 老（ま）
 官首（の） 家（う） 免（は） 未（は） 俵
 潜魚
 渭雲
 春里
 渭船
 戴二
 一鷺
 渭龍
 渭隨
 柳筵

+

夏（の） 水（日） 系（る） 俵（吉）
 物（は） 二（人） 睦（し） 花（は） 歌
 力（と） かん（り） 万（の） 羽（ま） 吉
 手（は） 柳（の） 緒（の） 温（盤） 像
 洲（子） 中（し） 京（と） 水（也）
 情（の） み（と） 濱（は） 碓（さ） の
 美（代） あり（き） 牡丹（梅） 蠟
 平（は） 岸（の） 郭（の） 郭（の）
 炭（田） 門（の） 高（の） 家
 渭水
 敬亭
 渭圭
 一鷺
 兔北
 渭雲
 小筵
 渭船
 戴二

工ま—こつへ毛やる小糸取
 一 改 浩ふ 九重法町
 鹽もくく漣をらる 互腐の湯
 ちりとと下くく鴨、盲子
 榎木屋へ去るぬ香あ館の月
 茂 沢 潮の 越々 妙々
 露お母もあ人 濱のちる 慈
 小面うの 惜い 崎くの 三味線
 わの者 猫きん 女 丈と するりりり
 果 然
 渭 新
 小 娥
 潜 魚
 渭 水
 渭 園
 渭 隨
 柳 筵
 渭 車

磔の途か やくく 海原 敬亭
 笛吹く友 袴花の乃らく 又 睡
 松より 死に 伎町の 春里



善惡不二

墨流川

瓦煙斎

茂志雄

すめい 雲を濁さば

毒を多量に飲

めば

心も濁る

あま

うら

大評辯

予性嚴沙陽の没敏み富く月早に眼鏡を
 又約るに存存いふあもくをさきさうく小やうも
 ういふものよすううこもくみらゆやのうれり
 めりぬいしきく早きうもも急かす寸燃火小
 知ぬ上のいほりうなううもくあく申る者
 ありて共うハ急きりぬふをさきさうく
 然もらうこくくて早者流の者流あともハ
 いろ流のわしうく早流あのもくく日空を瑞火

一真と名く彼和歌とてこの書りよハ
贈まに法笑みか川せく勝事法い
そつ志く待き終るにと勤とすとい半途
ありて廢す者衆し一甲羅の情れ
そし少終く歎息は折新瀧と定人
と歎きりよのそ終よふと言みそ情よ
くんと堂室くしむおらんそのわらふ
そまに思くはるく定人か言み葉と
室中流るしと成くもや夕部ふとつし

かほま思く歌よハ歌少く、亦歌の詞か
てか法かこの文章小のそあし二つ入の流
乃くくつたり皆みおら物くこの法を
を解き易に人信小きういむ世も過く句と
いつる物くとして其く又法もく一廢疑乃
匡別法みさうかりき中もさう歌もあ
了も他終の一句は可つ吉は海く一法通の
列もあをなくと今ハ各自は好あし
中も法いよめかくし一自も越法合と

春に花は幾渦秋を葉も

を果は延る家難し

茂志男

奔句を卓敬されは其願ん半は
ありて机下書書の裁を名物
類子因く如き色ありて是も
潭笑のふらふら

○茗荷屋輕燒

板あり

皆より久くと物願まゝ輕燒の
てんと此草のほらめりや

○長唄

三弦器を調と

いと心もきく世にまうにきくせん

祢も久しすよむきうつと

○當時流行詞

何えりも周雲ぬの旅もる

あよ月よとちあくらんの後

○大小の作 風鈴十二月

反故歌賦

大小の別ハ墨の濃薄又字と仮名
朱書金銀いりやうもあま

風鈴や春一時に水神

涅槃月おとあま法の家る

かさんやこりりさほりる

風鈴や天千口あるる

六月毎の濁りも深ぬれば
涼し風の握巻、あつちりか
湯茶ぬと同じ、あつちりか
やんや初らぬの顔と
川鈴や市の侍も菊の宿
ぬる水も短策と見え
川鈴や浮世ハ流る神印
あつちりや空をたふす
神祇も毛糸も
国月

○大黒湯

案下一笑戲筆

今年元三十四年
あつちり金塚へ登るを
節を守りてある
鴨の念をわらう世波
味頃清玉の厄ハ芥
酒湯ハみのほ子
五畿七道後
貴へまゝて授
例の湯か

其功のまをさるし著物かそ此不思議
あま羊加年のちく免を色茶へきく照
よむくひ侍る

大おくの湯ときく流や何毛鴨
めそ鯛とりかめくはきいきき

暗業呷子粕涎

醉書

○人間五十年

人並平るま月日とあまほへ
茂志雄

二十の知をどうかかぬる

○三尊来迎

ニを市川へ流きて一味平等の
之味平入屋くと云く

釈迦古門あ鬼のみも川連て

須耳貧

甥親走へある賽銭

○穴さか

清濁両用

道平穴あ^有いさく^避を様鯛
荒探

○すいの

七人の狸を準て握虎も七人

ひやつこひ

順に讀へ

ややうこひ

四方兩斜
やつこ六人

つどつみつ

よみろり
一人あま

こやぶここ

ひやつこひ奴

名物題ハ乞まてくまて止る

○九の字

九く節句功徳を諄く九歌

管長軒

○回文

古式

きうりのみかみあめかあらのらん

及故甜

○三段也文

新格

みたてし月やあきのあはさけ

果然

○折句

古式

昔の粉も雪も水あてやせし

飲雨亭

あさくちあめくや

全

柳多なりハ暑

○味漢两面

海旭遂薦

無陽月而死去須有笑之安作正哉

かみか月西越と海と旭と那

○文字冠かゝるの沓 新戯考

黒うるよ 豆こそ人の種たる

まぬの飢物まありよ夷仲

ゆえぬ帝りりり座の匂は

四のとほふあへて

○六悔轉換

系即東湖和尚枝豆と茗荷

と伝りしん

そえかたはは若はまもめて日を

かくるはあんなあううな栄るを

いつまそまかくある款はあふあよ

今わくきあは何とせんし

若は字と曹輩妹脊の字眼

いふもをさくく

長崎諏方社奉納能譜ゆふ守記

願主の姓名は忘しきり初輩の功

接中伝ふるをのふと

烽火山之記

所謂於肥之前列長崎有山。名烽火山。其巔有竈。是將有事於西國。則縱狼煙而傳之。豐列之小倉。而後復告其急於難波矣。予一時有隨監巡察焉。或日升此岑也。當此夏日。陽暉灼然如蒸。如炒。如坐紅爐中。殊此地濕熱多。而非他國之類。稍攀峯數百步。太峻而甚高。仰觀之。則如立屏風。鼻目為之所壅。足則重。而以輓轡如卷。還艱難辛苦。漸到其顛上。

果有竈。因望窺之。則其內甚濶。而積霜星之。久潤。泰和之德。生茫茫艸。且偃風化。殆似起波瀾。於是乎竊謂今也。當如此之太平。宜無此備而可也。然居安不忘危。其汲計遠慮。無有庸劣之識。不可得而論者也。嗟呼。可謂至矣。盡矣。又以古昔仁德。天皇登高樓。瞻望民竈之瞻而悅之。今則反。是。以其烟之絕。為悅。則誠可准於所謂諫鼓苔深。而鳥不動也歟。又有一感。吾常以

慕芭翁吊黄泉之兵士之吟故今視此竈之
复艸益思之感慨歎息不能自止雖不中乎
滑稽之術而為一轉形容之鄙歌世稱諷諧曰

复艸八塚の波や紫烽火山

大盤藤 純明誌

果實強固蓋蔽之便其物甚微而耐毒之
入其葉叶之動生葉之體其物甚微而耐毒之
其體其葉半壽而令其當其風之吹平宜無
其體其葉半壽而令其當其風之吹平宜無
其體其葉半壽而令其當其風之吹平宜無

右東のきりぎりすく世の流を布る句くはな牛よ
向てともあつとわらうり殆未飽くして近慕志
と之と羨むる筆の安とよほむるものたのこ

雪月花一なるをえする知本くね 貞徳

一借とほりくありにんぢ 季吟

かくさぬと我ハ萩けようし 芭蕉

空よ志るやぬのやこの輝のや 肖柏

みいあゆふ赤良のなひておろふ 宗祇

うちとかの香をせられて寝ぬおの 宗長

梅をともん蒼きやとつゆ字かむ 元政

有月よりくそまぬる徳の者
静る花と遊遊てゆくわづらふ
秋の光あり涼し枇杷の枝
乱藤ハ角力あつて似るをら柴
頼朝うづらの軍よ名うり川
小田原やあひひのまよ川をせ
夏山やあひひのまよ川をせ
咲かけて翁父んせよ山さくら
くの山たぞれぬへき岩よササ

近松殿下
定家々
光廣々
義家公
右大将
秀吉公
重忠
長遠公
鴨長明

七七

月まらや布月八日の花うへ
らむまを花よさくや帰る戸
祇屋舎やせんきまちく引の山
花嬰雲れをたもあつたへうね
悟まをさうらあの人々の轆
あかぬくさよさくや蜂の声
果冬皆佛の道するをあが
院ぬま八年の幾何と温泉の念
きて福へのふれうき具と餅

一休禪師
法蓮和尚
曾呂利
鴨長明
其角
筑雪
珪琳
祇空
道春

学毛是看て出よ花のあめ
 名葉より名は古めし一厨の誓
 朝に死はぬ里もあつた月の
 暮ふんをやゆあけのうらら
 卯月来てねあま啼や杜宇
 きをちめ老の敬も磨斗月が
 顔の花をかじあつた松と夕へう
 三夕もわらふむとのなきの秋
 尾頭のはらわらふき生海流うか
 利休
 持常信
 西鶴
 卜養
 宗鑑
 玄旨
 守武
 元隣
 去来



景清のゆきれ一帯のゆき来うね
 百のやうな夢一帯のふしう紫
 けふのめすれは夜あき蛇をうら
 松よ夜蜻あまのゆるんあま
 白のしる系の赤月う江戸のあ
 かしくうらまをる染や千草
 んと羽と合をけ鶴や夕すみ
 けふのふ人美ういふほくきん
 煤掃や何をとらふも推らん
 力丸
 素園
 不角
 宗因
 秋色
 鷺水
 沾徳
 赤岩
 支考

あのくちらうととお撲ハ祝儀を
 ほろきく雲路をくしし
 抱く麻も肌はちかぬ火桶が
 一分二分あんのこのとて晦日月
 雷本もき里小蛇の夢り那
 氷水の控所ふく一雪此あ
 梅のそ子香だくくろを筆もる
 おのれくきさつて空の竹
 山をぬく力もねまのまねる
 許六
 露川
 貞室
 冠里子
 露沾子
 鬼貫
 紹巴
 望一
 大高源吉
 子葉

け御をくき鏡舎あううん
 初あつ流り波も横かとり
 梨子のをね縛るも己ら此のぬを
 雨夜ハ有漏のめらととりあの花のぬ
 ち燈筆をさハめうき柱う那
 有るこ子よ髪ふくくき若はど
 一カ半やああまうくふえ慈のり
 英一蝶
 花女
 花雲
 梨水
 車輪下
 千那
 園女
 梅盛

其軸

負しはの春ふいあれあううが
 果然

春

東林改

かたぬきで通るや毒千腕月

李因

夏

蜀魂新吉原に夜多し雨

秋

ふとりぬえ二人あえする羅紗

冬

年口とれあり昔の事ゆゑ

青帝

盲子泣いぢり汚ち了難かる

疎影

朱律

己うゆの火とくくち炊く如

白商

いと黒くぬ月、私かしの鏡うら

黒季

木枯や花の盛るそ所るなふ

春 暮 與 桂條亭

空や曳舟も子日枯小松川 許一

夏部

灌佛や衣更着敵し梅実のる

秋色

ほのくを病ハ白菊は芙蓉が

冬行

人子皆禁せし松の宮伝ふる

時

春や日一柳の行所り 尺波

夏

梨の虫人の子あつて日敷か

秋

尾ふく猪と招くは山南ひ子

冬

おしとくも葉も皆切し十好子

199
447

印行五百部之内
第 初 一 號

夏

飲雨亭

出女の手紙草紙、雲霧の掛

果然

夏

杜若女支那やうな蒼々り

秋

つり毛兎の余考のや子枕

冬

さつちの笑や余はりきり

昭和五年十一月廿五日印刷
昭和五年十一月廿八日發行

第七期
第一回

編書複製會

非賣品

編輯兼發行者 東京市牛込區富久町八十四番地
彫刻者 山田清作
印刷者 大塚祐次
阿部鍋五郎
發行所 東京市牛込區富久町八十四番地
米山堂

電話四三三四六一番
編書東京三三五〇九番

